

2021年2月21日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会

奏楽

前奏

招詞

イザヤ書 第25章9節

讃美歌

讃美歌 21-18 (心を高くあげよ！)

交読

詩編 第121篇 (p. 141)

祈祷

聖書

マルコによる福音書 第13章28~31節

(新約聖書 p. 89)

讃美歌

讃美歌 21-300 (十字架のもとに)

説教

「滅びない言葉」

マルコによる福音書は、その伝道の初めからイエスさまが、言葉を語り続けた方であることを繰り返し語ります。すでに第1章では、カファルナウムの会堂で、イエスさまが説教な

さったことを伝え、「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」と書きました。この後、イエスさまは、いつもこの力ある言葉を語り、人々の罪からの解放を促されたということをマルコは告げます。

ところで、この第13章に書かれている「わたしの言葉」というのは、細かいことを言うようですが、複数形で記されています。わたしが語った、もろもろの言葉、すべての言葉は、過ぎ行くことがないという意味です。過ぎ行かないとすれば、いったいどうなるのでしょうか。いつも、わたしたちを生かす言葉であり続けるということです。これまで教会は、この過ぎ行くことのない言葉に生きてきました。

同じような、初代の教会の生活を伝えている使徒言行録を見ると、すでに、その教会の歴史の初期、最初の教会のひとつエルサレムの教会で、いろいろな事件が起きたようです。エ

エルサレムの教会も繰り返し迫害にさらされ、有力な指導者であったヤコブが殺され、あるいは、ステファノが殉教の死を遂げます。そうしたとても厳しい状況にありながら、何とたちまち、教会の内部にも争いが生じています。いかにも、人間が作る教会らしい争いが中に生まれました。その争いも、イエスさまの教えをどのように解釈するのかというような教えの上での争いではなくて、食事を分配する上での公平、不公平が争われた。エルサレムの教会には、やもめたちが多く集まったようです。社会的に不遇な女性たちが集まりました。それは、教会に行けば共同の生活をすることができ、はっきり言えば、日常生活の心配がなくなったからです。皆が持ち寄った食べ物を、分け合う生活がそこに始まります。ところが、そうした人たちの、愛によって生かされているはずの者たちが、お互いに自分たちに対するやり方が、不公平だと言って喧嘩を始めます。しかも、その争いがギリシャ語を話すユダヤ人と、ヘブライ語を話すユダヤ人との対立と結びつきました。つまり、一般のエルサレム社会において、外国で育った者とユダヤの地で生まれ育った者、へ

ブライ語をあまりしゃべれないユダヤ人と、わずかなギリシャ的な知識しかないユダヤ人とが、お互いに差別し合っていたようです。それが、教会の中に持ち込まれたのかもしれませんが。聖書は、はっきり、そうした争いが起きたと書いています。けれど、そこで教会の責任者であったペトロたちはどうしたでしょうか。教会の中に深刻な争いが出てきました。自分たちが、責任を持って、その解決に乗り出さなければならなかったかもしれません。ところが、ペトロはこう言います。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を7人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします」。これは使徒言行録第6章に書かれている出来事です。ここに、教会での執事の務めの始まりがあると昔から信じられてきました。このときの食事の世話をする務めが、いわゆる執事職の始まりとなりました。

この箇所は、まだ神学大学の学生だった時に、ずいぶん厳しく考えさせられたことがあります。つまり牧師になった時に、祈りと御言葉にまず集中すべきであって、他のことは考えてはいけません。他のことに心を煩わせることなく、み言葉を説き明かすことに全力を挙げるべきだ。人に何とと言われても、たとえ牧師らしくないと言われても、み言葉を説き明かすことに集中しなければいけない。これはずいぶん厳しいことだと思って読みましたし、忘れたことはありません。神学校を出て牧師とされてから、牧師の集まりや研修会に参加することがありますが、伝道者についての理解が違う場面に出くわすことがあります。神学校によって違いを感じることもありますし、また個人的に違う理解を知ることもあります。それはどういうことかと言えば、簡単に言うと、牧師は説教だけやってはられないという理解です。説教だけしていればいいというのではない。もっといろいろとやるべきことがあるはずだという意見が必ずあります。もちろん、わたしなどが神学校で教えられたことは、牧師は他のことは何もしなくてもいいということではあり

ません。牧師だって教会の様々な奉仕や、信徒との教会生活を楽しむということがある。けれどどんなに素晴らしい活動であっても、喜ばしい奉仕であっても、もし、み言葉に生きることを妨げるようなものであるならば、そうしたことは一旦置いて、そこから離れなければならない。わたしたちの教会は、み言葉に立つのであって、み言葉以外のものによって、立っている教会だとすれば教会という名前にふさわしくないことになってしまう。キリストの教会であるとは言えなくなってしまう。牧師は、そのためにここにいるということです。

あるいはこういうことです。横山とわたしたち二人の就任式が行われたのは1995年でしたが、この時、篠田先生は当時の松永希久夫学長を説教者として呼んでくださいました。これはわたしたちにとっても、そして半田教会にとっても特別なことでした。というのも、そこで語られたことは半田教会のためでもありますし、伝道の現場に出たばかりの新米伝道者のために語ってくださったからです。そこで語られたことのうち、忘

れられないことが二つあります。一つは、牧師は信徒と神さまとの間であって邪魔をしてはいけないということ。二つ目は、牧師の務めは、キリストを指し示す道標に尽きる、ということでした。一つ目と二つ目はつながっており、牧師は自分自身を見て欲しい、わたしを見なさいではなく、牧師はキリストへとつながる道標だということです。それ以外の働きがあるわけではない。道標はきちんと指すべき方を指さなければなりません。正しい方向を指さなければなりません。そして、もし道標が道標としての働きをしなければ、それは信徒とキリストとの邪魔をしていることになるからです。

そこでイエスさまの言葉に戻ります。「わたしの言葉は決して滅びない」。滅びないと言われるキリストの言葉によって生きる教会、けれどそこに光が射している。マルコによる福音書は、いったい、誰がどんなふうにしたのか、その書いた状況を、思い浮べることはいまできなくなっていますが、こういう想像をします。「わたしの言葉は滅びない」と書いた時に、マル

コによる福音書の記者は、わたしが書いている、この言葉は普遍のもの、永遠のものだということを、どんなに喜びに溢れて書いたことだろうかと思います。これはわたしを生かしている、わたしたちを生かす、あなたがたを生かす、この滅びない言葉を書き記すこと、わたしのできることはこれしかない。そしてそれでいい。マルコはそう確信したはずです。

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」。これは、天地は滅びてしまうけれども、わたしたちは滅びないというわけではありません。天地は滅びると言った時に、その天地の中にわたしたちも含まれています。もちろん、み言葉を語っているマルコも含まれます。みんな入っています。けれど、その滅んで行く天地の中であって、このみ言葉が滅びないからこそ、実は、滅びるはずのわたしたちもまた、滅びないということが言えます。そこに、天地は過ぎ行くが、わたしの言葉は、過ぎ行かないというイエスさまの言葉の約束があります。

もともと、イエスさまの言葉は、どうしてここにこのように記されたかと言えば、この第13章の初め、もうわたしたちは、忘れかけているかもしれませんが、壮大なエルサレムの神殿を見ながら弟子たちが、先生、見てください、この立派さをと云った時に、イエスさまが、この神殿も過ぎ行くものだとお云ったところから始まります。そこで弟子たちは驚いて、この神殿さえも崩れるようなことは、いったい、いつ起こるのですか、と問いただした時に、イエスさまの長い言葉が、ここで語られました。苦しみの時、悲しみの時、滅びに直面する時がやって来る。けれど、それらはすべて世の終わりそのものではない。人の子が来る時がある。それが真実の最後の時である。そして、いちじくの木から教えを学びなさいと語り始められた。

このいちじくの木の譬えは、こういうふうに考えていいと思います。時は冬、苦しみが冬に起こらないように、とイエスさまは祈るようにお求めになりました。けれど、冬に苦しみが起きてしまう。あるいは冬のような苦しみが起こる。ユダヤ

の冬は、雨の季節だそうです。わたしたちも冷たい雨が降るとどうも礼拝に行きにくい。勇気がなくなってしまう。そんなふうに寒い雨の季節に、わたしたちは春を待ち、夏を待つ。ユダヤの人たちの春は、とても短いもののようで、ある本の表現ですと、春はたったひと晩、一夜が過ぎると、もう春ではなくて夏になっているほど、春は短いとあります。ですからここではむしろ、春を通り越して、夏が近づいたことが分かるのだとイエスさまは言われます。またある人は、夏は、すでに実りの季節、喜びの季節、力みなぎる季節だと言います。ここでイエスさまは、天地は滅びるのだと断言されながら、でも、喜びの季節がくることを冬の季節の間に知るがよいと、そう言われました。

そして 30 節では、「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない」と言われました。「この時代」というのが、いつの時代かということが、ここでは理解の上での問題になります。別の言葉で言えば「この世代」と言えます。こ

の世代、ジェネレーションです。あなたがたの生きている間に、このことが起こると、イエスさまが言われたと理解します。弟子たちにそう言われた。けれど、実際には弟子たちの生きている間に世の終わりはこなかったと考えられる。そうとすれば、この言葉をどう理解したらいいのか。けれど、わたしは、いつの時代でも「この時代」だと思います。わたしたちが生きている時代が、いつも世の終わりを目の前に控えている時代です。

しかも、ここでは「人の子が戸口に近づいていると悟りなさい」とあります。実は、原文には「人の子」という言葉がありません。日本語と違って、ギリシャ語の文章は、主語がなくても書くことができますから、ただ「戸口に近づいている」とだけ書いてあります。誰が、何が近づいたか分からない。神の国が近づいたと考える人もあります。ただ多くの聖書の翻訳は、このすぐ前にイエスさまが「人の子」の到来について語られましたから、「人の子が戸口に近づいていると悟りなさい」と

しています。人の子が戸口に立っていると、あなたがたはいつの時代においても言えるとイエスさまは言われました。このイエスさまの言葉は、その戸口に立っている、イエスさまご自身を指し示す言葉です。イエスさまが扉を開いて入って来られたら、そこで、わたしたちの生活にぱっと光が当たる。それに、いつも備えているような生き方を、ここでイエスさまはお求めになります。

どうしてイエスさまは、こうしたことを言われるのでしょうか。何よりも、イエスさまは弟子たちを励ましておられます。ここまでも、何度も言われました。気をつけていなさい、目を開いて見ていなさい、耐え忍びなさい、しっかり、足を踏まえて立っていなさい。そんなふうに弟子たちを一所懸命励ましてきてくださって、ここでも更に励ましていてくださる。今、わたしは十字架につく、甦りのいのちに生きる、そしてまたここに帰って来る。あなたがたのそばにいつもいるために。そして、最後の勝利の必ずもたらす。それを信じて生きる

がいい。何も見えなくなったと思う時にも、わたしは、あなたがたのすぐそばにいる。それを忘れないでほしい。イエスさまは、そのようなご自身の近さをここにおいて明らかに約束してくださっている。これが、ここで語られている、「わたしの言葉は決して滅びない」と言っておられることの内容です。ただ単に永遠不滅な内容の言葉が、どこかに金文字で記されているというようなことではありません。

わたしたちは来週、半田と奥田でそれぞれ聖餐にあずかります。この聖餐は、今日の聖書箇所ですぐ後で、イエスさまが弟子たちに与えてくださった食事に始まるものです。裏切りの弟子ユダが混じっている。その意味では、ただ食卓の上での争いで崩されそうになった教会よりも、もっともっと厳しい状況を抱え込んだ 12 人の弟子の集団でした。イエスさまを売る者が、そこにいる教会です。その 12 人が囲っている食卓で、イエスさまが、これは、あなたがたを神との不変の約束の中に生かすわたしのからだ、わたしの血である、と言ってパンと杯を与

えてくださいました。このことからこの主イエスの食卓の歴史が始まりました。教会は、説教を通じてみ言葉を聴き続けると共に、この食卓を守ることによって生きてきました。

わたしたちの教会で聖餐の時にパンと杯は、この説教台の前にあります聖餐卓と言われるこの長方形のテーブルで行われます。もともとこれは石の棺をかたどったものです。そして石の棺の中に何が入っていたかという、殉教者、自分たちの信仰の仲間、信仰のゆえに殺された人たちの亡骸が入れられていた。その柩の上に、主イエスの食事を置きました。それは、まさに天地は滅びるがわたしの言葉は滅びないという主イエスの言葉、決して滅びることがないと言われた主の言葉によってのみ、生きようとした信仰の姿勢であったと思います。この滅びない言葉に結ばれ、そして生かされていることを何にもまさる感謝とし、望みとしたいと思います。お祈り。いたします。



祝 禱

平和のうちに、この世へと出て行きなさい。  
主なる神に仕え、隣人を愛し、  
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。  
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と  
聖霊との親しき交わりとが、  
あなたがた一同と共にあるように。      アーメン

後 奏

<礼拝終了>